

使徒の働き15章12－29節 「ユダヤ人と異邦人の一致」

1A 知恵のことば 12－21

1B ペテロの説明 12－14

2B 預言者たちのことば 15－18

3B 異邦人とユダヤ人の共存 19－21

2A 全教会の決定 22－29

1B ユダとシラスの派遣 22－27

2B 聖霊による決定 28－29

本文

使徒の働き 15 章を開いてください。私たちは、15 章の 11 節まで前回読みました。エルサレムにある教会で、とてつもなく大事な問題、「神の教会に、異邦人が異邦人のままで入ることができるのか？」ということです。パウロとバルナバが監督をしているアンティオキアの教会に、エルサレムの教会から人々が来て、「**モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない(15:1)**」と言ってしまったのです。

それでパウロとバルナバはエルサレムに下って行きました。教会の指導者たちは、彼らを暖かく変えました。それから、二人は、異邦人の間で神が行われたことを報告しました。ところが、パリサイ派の者で信者になった人たちが、「**異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきである(15:5)**」と言ったのです。

それで、激しい論争が起こりました。しかし、そこで立ち上がったのがペテロです。ペテロは、異邦人に福音のことばを語ったら、聖霊が彼らにも下った話をして、主は、人の心を信仰によってきよめてくださること。そして、私たちユダヤ人たち自身でさえ、負いきれないくびきを、異邦人の弟子たちに掛けて、神を試みてはならないと言いました。

私たちに、ここで問われているのは、自分自身が神の恵みによって救われているのに、自分たちと同じようにならなければいけないとして条件を造ることです。恵みによる救い、その福音は、ただ信仰によるものですから、だれにでも届いています。信じるだれにでも届いているところを、言葉や行いによって、そうではないかのように壁を作ることが問題なのです。

1A 知恵のことば 12－21

1B ペテロの説明 12－14

¹² すると、全会衆は静かになった。そして、バルナバとパウロが、神が彼らを通して異邦人の間で

行われたしるしと不思議について話すのに、耳を傾けた。

ペテロのことばを聞いて、よかったです、「**全会衆は静かになった**」とあります。一部の会衆ではなく、全会衆です。教会には、神からの啓示があり、そして御霊によって一致があります。それを妨げるのは、神の恵みではない、人間の考えを持ってきたりする時であり、それで壁が作り出されます。しかし、主が建てられる教会には、御霊の一致があるのです。「エペ 4:2-3 **謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、3 平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい。**」

そして、バルナバとパウロが、異邦人の間でなされた神のわざを話しています。これを話していたら、途中でパリサイ派の人たちが立ち上がって論争が起こって、今、静まったので、ようやくその続きが話せたのです。私たちも、人間的な議論によって、恵みのわざを傾聴することが妨げられないとうれしいですね。パウロが、ピリピの教会の人々に書きました。「ピリ 4:8 **最後に、兄弟たち。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。**」

¹³ 二人が話し終わると、ヤコブが応じて言った。「兄弟たち、私の言うことを聞いてください。¹⁴ 神が初めに、どのように異邦人を顧みて、彼らの中から御名のために民をお召しになったかについては、シメオンが説明しました。

ヤコブは、聖書の中で同名の人が何人も出てきますが、ここではイエスの半兄弟であるヤコブのことです。彼は血縁の兄弟であったものの、その時は信じていませんでした。主の復活を目撃してから信仰を持ちました。ステパノの殉教の後、人々が散っていき、福音宣教が広がっていきました。ペテロなども、巡回の旅に出かけました。それでエルサレムの教会の監督が、ヤコブに任されていたのです。彼は教会の伝承では、「義人ヤコブ」と呼ばれていました。人々から非常に尊敬されていたそうです。

彼が、ペテロの話に応じて話しました。まず「兄弟たち」と言っています。仲間のあなた方に言います、という意味合いです。そして、「**シメオンが説明しました**」と言っていますが、ペテロのアラム語あるいはヘブル語名です。親しみを込めた呼び名で、ペテロがユダヤ人であることを強調しています。ユダヤ人はユダヤ人として、自分たちのアイデンティティーを壊すことなく、ただ、異邦人が救いに加えられているのだよ、という恵みについて話します。

これは、とても大切ですね。異邦人がユダヤ化するのは間違っていますが、ユダヤ人が異邦人化することも間違っています。私たちがキリストにあって一つになるというのは、自分が相手のよう

になるということではなく、愛にあってその違いを尊ぶことです。そして、同じキリストのうちにある者なのだと認め合い、受け入れ合うことです。パウロがガラテヤ書で、こう言いました。「ガラ 3:27-28 キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」しかし、キリストにあって男と女が一つだからといって、男が女のようになることはありません。

女も男のようになることではありません。それぞれに与えられた働きがあり、それが異なっても、相手を敬い、愛をもって互いに従うことによって、一致が保たれます。そして、その愛をもって敬うことは、キリストにあるヘリクダリを学ぶからこそできることです。キリストにあって一つであり、それぞれを敬い、それで違いをかえって喜ぶのです。

そして、「神が初めに、どのように異邦人を顧みて、彼らの中から御名のために民をお召しになったか」と言っています。異邦人を顧みているのは、私たちがやっていることではなく、神なのということです。そして、大事なことは、異邦人も主がご自分の名のように、彼らの中からお召しになっているということです。異邦人は異邦人で、神の民ではないというのが、ユダヤ人たちの考えでした。しかし違いますよ、とヤコブははっきりと言っています。

しかも、「民をお召しになった」と言っています。キリストにあって、異邦人もユダヤ人と同じ民になったということです。パウロが、エペソ書でこのことを説明しています。「3:5-6 この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。6 それは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」強調されているのが、「共に」であります。

2B 預言者たちのことば 15－18

¹⁵ 預言者たちのことばもこれと一致していて、次のように書かれています。

非常に大事な話です。ヤコブは、ペテロが神の啓示を受けたということだけに、異邦人をキリストにあって受け入れる話をしていません。実に、彼らの信じている聖書にそれが書いてあるということです。新しいことではなく、すでに預言者たちによって証しされていたのです。

イエスご自身についても、ユダヤ人たちが反対した時に、主が言われましたね。「ヨハ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。」ユダヤ人たちには、イエスは勝手に自分を預言者であるとか、メシアであるとか主張していると考えている者たちが多かったですが、これと同じように、異邦人が

救われることについても、勝手にそのようなことを言っている、聖書にはない新しいことを言うように、ユダヤ人たちは受け止めている者たちがいました。そうではなく、自分たちの伝統や解釈、また自分たちの見方が、聖書に書かれていることを曇らせているにしか過ぎませんでした。

¹⁶『その後、わたしは 倒れているダビデの仮庵を再び建て直す。その廃墟を建て直し、それを堅く立てる。¹⁷ それは、人々のうちの残りの者と わたしの名で呼ばれるすべての異邦人が、主を求めようになるためだ。¹⁸——昔から知らされていたこと、それを行う主のことば。』

これは、アモス書からの引用です。「**ダビデの仮庵を建て直す**」とは、イスラエルを建て直し、回復させるということです。ここで興味深いのは、ダビデの家と言わずに、仮庵と言っていることですね。これは、ダビデの時には神の建物、神殿がありませんでした。契約の箱は、以前は至聖所の中にあり、大祭司が年に一度、いけにえの血を通して近づいたのです。けれども、ダビデの時には天幕があり、そこにそのまま契約の箱があったのです。人々がそのまま神に近づくことができる恵みを、予めして示していた象徴的な姿です。後に、キリストが十字架にかけられ死なれる時に、神殿が上から下に垂れ幕が真っ二つに裂けましたが、その時に、神の御座にキリストの流された血によって、そのまま真っ直ぐに近づくことができるようにされました。

そして、「**人々のうちの残りの者**」というのは、イスラエルの中で残りの者ということです。すべてのイスラエル人が救われるのではなく、残りの者が救われるのです。イザヤの預言など、数多くがはっきりと、イスラエル人の中でも悔い改めない者は滅びるが、残りの者たちが救われる預言が数多くあります。

そして、「**わたしの名で呼ばれるすべての異邦人**」とあります。強調されているのは、「すべて」です。信じる者、主の名を呼び求める者は、みな救われるということであり、神の救いに対する心の広さを示しています。

アモス書だけでなく、預言書の数多い箇所、イスラエルの残りの民だけでなく、異邦人も主の知識にあずかるようになることを教えています。「詩 86:9 主よ **あなたが造られたすべての国々はあなたの御前に来て伏し拝み あなたの御名をあがめます。**」「イザ 11:10 その日になると、エッサイの根はもろもろの民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のとどまるところは栄光に輝く。」「マラ 1:11 日の昇るところから日の沈むところまで、わたしの名は国々の間で偉大であり、すべての場所で、わたしの名のためにきよいささげ物が献げられ、香がたかれる。まことに、国々の間で偉大なのは、わたしの名。——万軍の【主】は言われる——」

他にも、数多くあります。なのに、どうしてユダヤ人が気づかなかったのか？と思われるかもしれませんが、おそらく、彼らは異邦人の救いは信じていたと思います。けれども、それは終わりの日の

ことであり、はるか先にこのことが起こると思っていたかもしれませんが。これはすばらしいことだけれども、今のことではないということです。ちょうど、マルタがラザロについてイエスに語ったことに似ています。「ヨハ 11:24 終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」でも主は、「わたしがよみがえりです。いのちです。(25 節)」と言われましたね。

異邦人の救いは終わりの日のことであるが、今は、イスラエルの救いの時なのだと思っていたのでしょ。異邦人の時はまだまだ先のことだと。主イエスご自身も、イスラエルの失われた羊のために来たと言われていましたから。けれども、主はよみがえられて、天に昇られる前に、すべての国民を弟子としなさいと言われていました。こんなにも早く、終わりの日が来るなんてと思っていたのではないのでしょうか？そう、「ヨハ 4:35『まだ四カ月あって、それから刈り入れだ』」と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。色づいて、仮入るばかりになっています」と言われたように、まさか、終わりの日の回復が今、始まっていると思っていなかったのだと思います。だから、このことが分かったユダヤ人信者たちは、異邦人を神が顧みてくださったと知って、今が終わりの日であり、主が来られるのが近いと悟ったのです。

私たちは今、御霊にあって終わりの日を生きています。結果的に、すでに二千年経っているのですが、しかし、いつ主が来られてもおかしくない前夜に生きているのだと教えるのが、私たちに注がれた御霊です。以前、興味深い議論がありました。ある賛美で、「主よ、来てください」という歌詞がありました。それは聖霊によって主がこの場所に来てくださいという意味で訳されていましたが、妻が、「いや、これは再臨の主のことでしょ？」と思っていました。その日本語訳をした人と話しましたが、確かに元の歌詞は、どちらとも取れるのです。私は、どちらも正しいと思います。御霊が注がれる、そのことによって主が今にでも来てくださるという確信が与えられる、ということです。

3B 異邦人とユダヤ人の共存 19－21

¹⁹ ですから、私の判断では、異邦人の間で神に立ち返る者たちを悩ませてはいけません。

19 節と 20 節が、今晚の学びの本題というべきところです。主のからだにおいて、恵みの福音が浸透していなければいけない。異邦人を悩ませてはいけません。けれども、20 節を見れば、ユダヤ人たちにつまずきになるようなことは避けてくださいと勧めています。恵みの福音には、愛によって人々を配慮し、自分の自由によって相手をつまずかせるようなことを避ける、ということです。

まず、ヤコブは、「異邦人の間で神に立ち返る者たちを悩ませてはいけません」ということです。あくまでも異邦人の中で神に立ち返る者であり、必ずしも異邦人を悩ませてはいけないということではありません。罪の中に生きている者に合わせる必要はありません。罪は罪であると、はっきりと伝えないといけません。しかし、立ち返ろうとしている時に、「これこれをしなければいけない」として、余計に負担をかけてはいけません。そのままの姿で、悔い改めて、神のところに近づきま

す。そこに妨げの石を置いてはいけません。

そうやって悩ます者たちが、教会には必ず忍び込んできます。警戒する必要があります。「ロマ 16:17-18 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまずきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。」

²⁰ ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。

ヤコブは、ユダヤ人信者に仕えている指導者です。パウロたちは異邦人に仕える指導者でしたが、心は同じです。それは、「兄弟に対する愛の配慮」です。ヤコブは、異邦人を悩ましてはいけないと思い、パウロは、ユダヤ人に対して異邦人信者が愛していることを、慈善行為によって示すことに気づかっていました。ここでヤコブが提案したことは、「ユダヤ人信者が、異邦人信者と交わる時につまずきにならないように、ここだけは配慮してください。」というお願いです。

異邦人社会では当たり前になっていたことでも、ユダヤ人には耐えられないものがありました。それがここに書かれていることです。一つ目は、「偶像に供えて汚れたもの」です。市場で売られている肉は、まず偶像に供えられてから売られています。それで良心を痛める兄弟がいるということです。パウロも、ロマ 14 章全体で取り組んでいます。肉を食べると、心が痛むので野菜だけ食べている兄弟たちがいます。それで、彼は肉を食べないと言い、理由は次の通りです。「14:15 もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているなら、あなたはもはや愛によって歩んではいけません。キリストが代わりに死んでくださった、そのような人を、あなたの食べ物の中で滅ぼさないでください。」肉は、神がくださっているもので、それ自体は汚れていません。けれども、兄弟がそれで悩ませているなら、それは罪なのです。愛の欠如という意味での罪です。

次に「淫らな行い」については、ギリシア・ローマ社会では当たり前に行われていた忌まわしい行いです。そして異教の儀式と共にこれらのことが行われていました。異邦人として、キリスト者であれば避けなければいけません。パウロの手紙にも、それは何度となく、強く警戒し、避けなければいけないと教えています。「I コリ 6:9-10 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、10 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。」

「絞め殺したもの」は、異教の中には、血のまじったものは、いのちを食べるというような考えで、

絞め殺しただけで血がそのまま含まれるようにする食べ物があります。それをかえって戒めているのは、主の戒めです。血にいのちがあるので、かえって血を食べてはならないのです。「レビ 17:13-14 イスラエルの子らや彼らの間に寄留している者のだれでも、食べることができる獣や鳥を狩りで捕らえた人は、その血を注ぎ出し、土でおおう。14 すべての肉のいのちは、その血がいのちそのものである。それゆえ、わたしはイスラエルの子らに言ったのである。『あなたがたは、いかなる肉の血も食べてはならない。すべての肉のいのちは、その血そのものであるからだ。それを食べる者はだれでも断ち切られる』と。」このことが、キリストが血を流され、それが、この方のいのちが注がれ、私たちの与えられるという、とても大切な意味を持たせます。

²¹ モーセの律法は、昔から町ごとに宣べ伝える者たちがいて、安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」

今に至るまで、ユダヤ教の会堂では、一年にモーセの律法を、創世記から申命記までを朗読する習慣があります。バラシャと呼びますが、世界中のどの会堂に行っても、同じ箇所を朗読し、また学びます。異邦人であっても、神のことばを聞くとしたら諸会堂においてであり、そこではモーセの律法が読まれているということで、このような基本的なことについては知識があることを知ってのことです。要は、彼らの重荷にならない程度に、同じユダヤ人の信者たちを敬うということです。

パウロは、ロマ 15 章で、異邦人たちはユダヤ人の霊的なことにあずかったと言っています(27 節)。3 章 2 節では、「彼ら(ユダヤ人)は神のことばを委ねられました。」と言っています。異邦人は、福音のことばを聞き、また神のことばを教えられ、それで信仰が育てられます。敬うべき最低限のことだけで、あとは割礼、安息日や祭り、その他の食物規定など守らなくてよいのです。

2A 全教会の決定 22-29

1B ユダとシラスの派遣 22-27

²² そこで、使徒たちと長老たちは、全教会とともに、自分たちの中から人を選んで、パウロとバルナバと一緒にアンティオキアに送ることに決めた。選ばれたのはバルサバと呼ばれるユダとシラスで、兄弟たちの間で指導的な人であった。

「使徒たちと長老たちは、全教会とともに」と言っていますね。つまり、使徒たちだけではないのです。エルサレムやユダヤの諸教会の長老たちも同意しています。それだけではありません。「全教会」です。ヤコブの言った言葉は、すべての人が満足するものでした。知恵ですね。知恵というのは、世渡りができる、ちょっとずるがしこいような内容のものでは、聖書ではありません。平和をもたらすものです。むしろ、相対する二つの意見、分裂を呼び起こすほどの対立の中に、両者が納得するような、不思議な御霊の一致をもたらすような、ことばを知恵と呼びます。

ヤコブ自身が、手紙の中で上からの真実な知恵について、こう説明しています。「3:13-18 あなたがたのうちで、知恵があり、分別のある人はだれでしょうか。その人はその知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい。14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや利己的な思いがあるなら、自慢したり、真理に逆らって偽ったりするのはやめなさい。15 そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。16 ねたみや利己的な思いのあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。17 しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善ありません。18 義の実を結ばせる種は、平和をつくる人々によって平和のうちに蒔かれるのです。」

そして、文書だけでなく、二人の証人を選びます。文書だけでは、パウロとバルナバが勝手に書いたとか、非難を免れません。申命記にある、二人、三人の証人がいて事実と認められると言う律法がありますね。そこには知恵があります。それで、文書を持って行く人々に、エルサレムで指導的な働きをしている、ユダとシラスが選ばれます。

「**バルサバと呼ばれるユダ**」とありますが、バルサバは「安息日の子」という意味です。2 章 23 節で、イスカリオテのユダに代わる使徒を選ぶ時に、二人を選びましたが、マッティアの他に、「**バルサバと呼ばれ、別名をユストというヨセフ**」とあります。もしかしたら兄弟かもしれません。彼は、ヘブル語を話すユダヤ人、ギリシアの影響を受けていない伝統的なグループのユダヤ人です。

そして、「**シラス**」ですが、彼にはラテン語名があって、手紙の中では「シルワノ」と出ています。使徒 16 章 37 節には、パウロと共にローマ市民であることも分かります。つまり、彼はギリシア語を話すユダヤ人、ヘレニスト、ギリシア系のユダヤ人です。以前、二者の対立が起こって、使徒たちが七人のギリシア系のユダヤ人を食卓に仕える者として選んだのを思い出してください。エルサレムから、この二人を代表として送るのは、ユダヤ人とギリシア人がキリストの平和で結ばれていることを示しています。そして、シラスが第二次宣教旅行でパウロに同行する人になります。

²³ 彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。「兄弟である使徒たちと長老たちは、アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつを送ります。²⁴ 私たちは何も指示していないのに、私たちの中のある者たちが出て行って、いろいろなことを言ってあなたがたを混乱させ、あなたがたの心を動揺させたと聞きました。

アンティオキアだけでなく、シリア地方、キリキア地方にも教会が建てられています。ルカはパウロとバルナバの宣教旅行だけを書き記していますが、その他に、パウロの故郷タルソのあるキリキア地方にも広範囲に、信者が興されていたということです。

そして、「モーセの慣習を守らないと救われれないと言った者たち」について、エルサレムから来たのは事実だけれども、彼らの指示なしで勝手にやってきたことを明確に伝えています。教会の指導者たちの間では、麗しい一致があったのですが、エルサレムの権威を振りかざして勝手に動いていた者たちだった、ということです。パウロの手紙、特にガラテヤ人の手紙には、そうした、エルサレムの権威を振りかざして教えていた、偽教師たちがいたことが詳しく書かれています。

教会には、御霊の一致、平和の実を求めるのではなく、いろいろなことを言って、混乱させ、心を動揺させるような者たちが必ず現れます。「Ⅰテモ 6:3-4 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかなう教えに同意しない者がいるなら、4 その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。」

教会は、霊の戦いの中にあります。悪魔や悪霊どもが、戦いを挑んでいるところで、主にあって強められ、霊の武具を身に着け、それで勇敢に戦う存在です。その中で、もっとも不毛な確執というのが、これです。実質ではなく、議論やことばの争いのために時間やエネルギーを費やすことです。そういったことが、今の時代は、ネット上で行われることが多いのですが、多くの現場の教会が反応していないのは、自分たちの戦いの現場がそこにはないことを知っているからです。他の教会について、ここは考えが違うのかなとか、問題があるのでは？と思うことがあっても、自分に与えられた召しは、悪魔から魂を奪還し、キリストの支配に移される神のお働きに、自分たちが従っている事であり、またキリストにあって育ち、養われ、成長することに身を献げていることです。

²⁵ そこで私たちは人を選び、私たちの愛するバルナバとパウロと一緒に、あなたがたのところに送ることを、全会一致で決めました。²⁶ 私たちの主イエス・キリストの名のために、いのちを献げている、バルナバとパウロと一緒にです。²⁷ こういうわけで、私たちはユダとシラスを遣わします。彼らは口頭で同じことを伝えるでしょう。

ヤコブたちの、バルナバとパウロの推薦です。彼らを「愛する」人々として書き記しています。愛と尊敬による結びつきです。それから、彼らを「いのちを献げている」と言っています。彼らの働きは、ただ福音を語ってそれで終わりではありませんでした。自分に死に、いのちを献げるという決意の中で行っていました。だから、だれも彼らの正統性を疑ってはならない、神のしもべであることを疑ってはならないと言う念押しです。

パウロの手紙にも、だれかを教会の人々に推薦する時に、どれほどの労苦をしたかを書き記しています。例えば、エパfrasについて、コロサイの人たちにパウロが書いています。「コロ 4:12 あなたがたの仲間の一人、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが神のみこころのすべてを確信し、成熟した者として堅く立つことが

できるように、あなたがたのために祈りに励んでいます。13 私はエパfrasのために証言します。彼はあなたがたのため、またラオディキアとヒエラポリスにいる人々のため、たいへん苦勞しています。」このように、愛と苦勞の実を結んでいることが、推薦できる理由となっています。ただ、ことばだけなのかどうか、実を見て見分けるのです。

2B 聖霊による決定 28－29

²⁸ 聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。²⁹ すなわち、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、淫らな行いを避けることです。これらを避けていれば、それで結構です。祝福を祈ります。」

ここで大事なのは、ヤコブが決定したのではなく、「私たち」ということ。使徒たちと長老たちの一致した思いであったこと。そして、何よりも、「聖霊」が導かれて決めたことなのだという事です。一人一人が聖霊に導かれて、それで一致していたということです。ルカは使徒の働きで、一貫して、それが聖霊の働きであることを伝えています。教会が、議論をして大事なことを決定する時に、聖霊の導きと決定の中で行っているのだと言うことを知る必要があります。

こうしてヤコブは、みなが一致して受け入れることのできる、言葉を語りました。聖霊によって語りました。第一コリント 12 章には、御霊の賜物として「知恵のことば」があります。知恵の言葉とは何か、それを知るには、この使徒の働き 15 章での出来事を見ると、よくわかります。両者が、御霊にある一致に献身していくのに、必要なことばを語ることで、そのことばが知恵のことばです。私たちの教会にも、御霊による知恵をもっともっと、求めていきましょう。